

「私の反抗期」

だいぶ前のことですが、テストもそろそろ近づいていたので、部屋の片づけもせずにごみ箱のような部屋で、勉強していました。しばらくすると母が部屋に入ってきて、「この子は手に負えん。」と半分投げ出したような口調で、

「あんた、ようこんな汚い部屋で勉強できるなあ。女の子やねんからちよつとは掃除くらいいいよ。」

と怒りました。「女の子やねんから」ということばに少々いら立ちを感じながらも、私は自分の周りを見回しました。ベッドの上はメチャクチャ、その周りには紙くずが散乱、ぬいぐるみやバレエ雑誌はそこいら中に投げ出してある……いちいち書いていたら原稿用紙が足りなくなってしまうそうです。二週間も掃除をしないと、こんなにも汚くなるのかと驚いた半面、ちよつとさぼりすぎたかな、と反省もありました。けれど、掃除するのはしんどいし……。そこで「テスト勉強」のことをだしにして、母に掃除してもらおうことを思いつきました。私は、

「今テスト勉強をしよるから、掃除しといてな。」

と、わざと「テスト勉強」のところを強調しました。すると母は、「はいはい、わかりました。」というような顔で、

「その代わり、頑張っていいよ。」

と言いました。でも、私はその声を聞き流して隣の部屋へ行きました。「やった、これで二十分は遊べる。」とばかりにテレビの方へ走りました。「お母さんありがとう。」なんて、これっぽちも思いませんでした。最初は、掃除が終わるまで、と自分に言い聞かせて見ていたけれど、テレビの誘惑に負けてしまい、結局は、テスト勉強そっちのけでお昼までテレビにくぎづけになってしまいました。

その夜のことです。時間割を合わそうかと、階段を上がって自分の部屋へ行きました。宿題をかばんの中へ入れようと思い、数学プリントを探しました。でも……ないのです。私は慌てふためいて、教科書の間やノートの間挟まってないかなど調べました。でもありません。私は泣きたい気持ちになりました。そのとき、母が掃除をしていたときの様子がちらつとうかび上がりました。

「お母さん、私の数学プリントどこへやったんよ。」

いきなり、突っかかるように聞きました。

「ほんなん知らんで。」

母はさすがに困惑した顔で答えました。

「うそばっかりよ。お母さんが掃除したときにどっかへやったんだあ。」

どつと涙があふれてきました。なぜ、こんなときに泣くのか、自分でもよくわかりません。

「人のせいにする前に、はよ自分で探さない。」

母は、最初はあきれたような顔をしていましたが、静かにこう言って部屋を出ていきました。私はあのときちゃんと片づけたんやからと例のように反省心もなく、叱られたことに腹を立ててふてくされていました。涙がとめどなく流れ、泣いてしまうと気持ちがかわり、ふと、プリントのことと、そのとき私のしたこととが頭をよぎりました。

「あれ、あそこに……。」

私は一瞬どきんとしました。そして、慌ててプリントを探しにかかりました。まずは机の上からと、いらなくなったプリントを整理しはじめたところ、新しいプリントが出てきました。もしや……と思つて慌てて開いてみると、紛れもなく数学のプリントでした。

体がカーッと熱くなつて、汗が流れてきました。母に対して「あんなだけ文句言うといて『自分の思い過ごしでした』なんて言えらんわ……どうしよう。」と思いました。わざとプリントを探すまねをしていると、母が、

「まあ、これでも食べべり。」

と、メロンを持ってきてくれました。私は思わず、「あっ、メロン！」と言いつつになりました。でも、そう簡単には手は出せません。しかし、だんだんと時間がたつにつれて、たかがプリント一枚のことで泣いてまで言い争って、結局は、自分が悪いのに母のせいにしてしまった、そんな自分が恥ずかしく思えてきました。

母がいないのを確かめて、メロンを口に入れてみました。口の中に甘い香りがひろがります。ふっふっふつと笑いがこみ上げてきます。今まで、母に突っかかるばかりで、人の迷惑なんか少しも考えなかった私でも、どんなに周りに迷惑をかけてきたか、なんとなくわかった気がしました。

「メロンおいしかったわ。……さっきのプリントな、机の上にあってん。」

母も、

「ほんま？あんたはおうちよこちよいやからな。」

とにっこりしてくれました。

さっきまでなんだかぎこちなかったのに、うまく母のムードに巻き込まれて、自然に打ち解けることができたのです。このとき私は、腹が立つとすぐ人に八つ当たりして、最後には自分でも訳がわからず泣いてしまう自分を恥ずかしく思いました。

きつと母は、自分は何もしていないのに自分のせいにされて、腹の中が煮えくり返るぐらい怒っていると思います。やっぱり母にはかかせません。母のほうが一枚も二枚も上手だと思えます。

この反抗期は、みんな一度は通り抜けなければならぬトンネルなのです。だから、トンネルの中で事故を起こさないように安全運転で出口まで行きたいと思っています。トンネルの向こう側には、きつとすばらしい未来が私を待っていてくれると信じているからです。

『第③⑥回小・中学生作文コンクール作文優秀作品集』きょうせいより

